

氏名	高濱 裕子 TAKAHAMA Yuko
所属 職名	人間文化創成科学研究科人間科学系 教授
学位	博士（人文科学）（2000お茶の水女子大学）
専門分野	生涯発達心理学・保育学
URL	
E-mail	takahama.yuko@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

葛藤処理方略
比較文化研究
文化差の発生過程
横断研究
縦断研究

Conflict management skills in children
Cross-cultural comparative study
Emergence process of cultural difference
Cross-sectional study
Longitudinal study

主要業績

学術論文 加藤美帆・高濱裕子・酒井朗・本山方子・天ヶ瀬正博 幼稚園・保育所・小学校連携の課題とは何か お茶の水女子大学人文科学研究, 第7巻, 87-98

学会発表 濱家徳子・高井次郎・高濱裕子・柴山真琴・福元真由美・坂上裕子・二宮克美・近江玲・島義弘・中山留美子・松井宏樹 日本心理学会第74回大会 大阪大学

学会発表 高濱裕子・氏家達夫・二宮克美・柴山真琴・坂上裕子・福元真由美・高辻千恵・島義弘・濱家徳子 葛藤処理方略の文化差の発生過程（7）：日本、韓国、中国の親子の葛藤場面の分析 日本発達心理学会第22回大会、東京学芸大学

学会発表 江村綾野・高濱裕子・本山方子 3歳から就学期までの環境移行と社会化プロセス（5）：幼稚園・保育所で子どもの学ぶことを、幼稚園・保育所の保育者と小学校教員はどのように認知しているのか 日本発達心理学会第22回大会、東京学芸大学

研究内容 / Research Pursuits

「葛藤処理方略の文化差の発生過程についての比較文化的研究」（科学研究費補助金B：連携研究者）第一次反抗期以降、家庭での社会化や就学前施設（保育所・幼稚園）および小学校での文化化の結果として出現すると予想される処理方略の文化差を検討した。発達過程に焦点化した比較文化的研究は、おそらく本研究が世界で初めてのものである。2010年度は、2008年度および2009年度に収集した縦断データの分析をおこなった。対象者は、日本、中国および韓国における4歳児のコホートと6歳児のコホートそれぞれ50名であった。内容は、家庭訪問による親への面接、親子課題、子ども課題であった。年齢差や文化差が析出されており、それらを統一的に説明する理論枠組みを引き続き検討した。「3歳から就学期までの環境移行における社会化・文化化についての追跡的研究」（科学研究費補助金B：研究代表者）研究プロジェクトの目的は次の4点を検討することであった。(1)社会的変化や少子化による対人関係の変化の実情を、他者との対人的調整力（交渉や葛藤処理）という観点から追跡的に検討する。(2)家庭から幼稚園への環境移行を、新たな環境の認知と環境への定位という生態学的観点から検討する。(3)幼稚園における遊びと小学校における学習との関係を、幼児期の心情・意欲・態度の発達と小学校での学びの発達という観点から検討する。(4)環境移行における社会化・文化化を、子どもにかかわる大人（保護者?幼稚園教師、幼稚園教師?小学校教師）の、子どもへの期待と新たな文化化のエージェントへの期待という観点から検討す

A cross-cultural comparative study of the development of conflict management skills in children. We examine a cultural difference of the processing of appearance as the result of socialization and enculturation in preschool and the elementary school. As

教育内容 / Educational Pursuits

大学院博士前期課程では、「親子関係論特論」、「親子関係論演習」、「外書講読」などを担当した。大学院博士後期課程では、「親行動発達支援演習」を担当した。「親子関係論特論」（前期）では、親子関係を研究する際に援用されることの多い「愛着理論」、「家族システム理論」などを取りあげ、その理論の生まれた背景や関連する理論などを紹介した。さらに『縦断研究の挑戦：発達を理解するために』（三宅和夫・高橋恵子編著、金子書房）をテキストとして使用し、講読・討論を進めた。「親子関係論演習」（後期）では、"Handbook of Parenting" Vol.3をテキストとして使用した。これらのテキストのもつ魅力が受講生の意欲を一層高め、毎回議論が活発であったこと、深化したことを特記しておきたい。学部教育では、前期に「生涯発達講義講読」、「人間関係学」、「児童学概論」を担当した。後期には「発達過程論」を担当した。これらの授業科目においてとりわけ意識した点は、親や大人側から見る（とらえる）という視点である。ともすると、乳幼児、児童、生徒側から見たりとらえたりすることが多い。しかし、養育する側（親、保育者）からの見え方やとらえ方を知ること、発達の相互影響性、互惠性に気づくことになった。

Graduate education : I took up the attachment theory and the family system theory, and outlined the background where those theories arose and the relating theory. Moreover, I valued the selection of the textbook, and used the book about the longitudinal

研究計画

比較文化研究は、その文化差を明らかにすることを目的とした研究から、状況や文脈による違いに着目した研究へと変化している。さらにわれわれが目指すのは、文化差がどのように生み出されるかといったプロセスへ焦点化した研究である。3年前に、日本、韓国、中国そしてアメリカの幼児から小学生までを対象とした「対人葛藤処理方略の文化差の発生過程についての比較文化的研究」に着手した。さらに文化差の発生過程をとらえるべく、日本、韓国そして中国の3か国における縦断研究を実施した。横断データと縦断データの知見を積み重ね、文化と発達の関係をさらに検討したい。三世代（祖父母、父母、子ども）を射程に入れた世代継承性についての研究を計画している。世代継承性はエリクソンによる概念であり、養護性や養育性とも密接に関連するが、実子の有無を超えた文化・芸術などの継承をも含めて検討したい。先行研究を概観すると、二世帯をカバーする研究はかなりおこなわれているが、三世帯はあまり検討されていない。血縁距離や居住距離と、社会資源の授受、資源の流れを検討することによって、現代の日本で展開されている三世帯の交流の実情を明らかにしたい。

メッセージ

現代社会におけるさまざまな課題を、発達心理学的な視点をもちつつ検討しています。親や保育者などの成人発達のメカニズムには、まだよくわからないことがあります。家庭や幼稚園・保育所などのフィールドに関与しつつ、対象を長期的に追跡するアプローチを採用しながら解明したいと思っています。また、私たちはいかなる道筋をたどって日本人になってゆくのかという疑問を解明するために、日本、韓国、中国そしてアメリカとの比較文化研究に取り組んでいます。社会・経済的変化が、親になるプロセスや家庭の養育機能にどのような影響を与えているのかを、東アジア諸国との比較によって明らかにしたいと思っています。